

Contents

支部活動報告

- 2009年「親と子の都市と建築講座」新潟 実施報告 五十嵐 由利子
- 建築文化週間2009 開催報告
 - 富山支所 [「こどもたてもの探偵団」にみんな集まれ!](#) 堀江 秀夫
 - 富山支所 [「北陸の建築文化と宮大工」](#) 富樫 豊
 - 石川支所 [「加賀の建築」](#) 村田 一也・森原 崇
- 2009年度 北陸支部大会 若手優秀プレゼンテーション賞 受賞にあたって
[ヘルムホルツ共鳴器の共鳴周波数の解析実験について](#) 飯塚 勇太
[寒冷地の住宅における給湯負荷およびCO2ヒートポンプ給湯機の効率に関する研究](#) 小澤 明也

支所だより

- 石川 [「土」に関わるが、泥舟にならないか?](#) 浦 憲親
- 長野 [土壁の起源についての考察](#) 新川 竜悠
- 福井 [土に学ぶ](#) 吉田 恵子

シリーズ

- 学生(長野) [八潮らしさとはなにか?](#) 田中 邦幸
- 学生(富山) [グリーンウッドワーキングを通じて](#) 石澤 栞実
- 学生(石川) [インサーの活動 ～笑顔が見たくて](#) 山本 義人
- いきいき街づくり(福井) [若狭町・熊川宿のまちづくり](#) 宮田 勝美

お知らせ

- 2010年度 北陸支部大会の論文募集
2010年度の北陸支部大会は7月17、18日に新潟工科大学で開催されます。
論文募集の締め切りは3月11日(必着)です。詳しくは[こちら](#)をご覧ください。
- 賛助会員を募集しております。詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。
(社)日本建築学会 北陸支部
〒920-0863 石川県金沢市玉川町15番1号 パークサイドビル3F
Tel: 076-220-5566 / Fax: 076-220-3344 / E-mail:ajj-h@p2222.nsk.ne.jp

2009年「親と子の都市と建築講座」新潟 実施報告

五十嵐由利子

(新潟大学教育学部 教授/親と子の建築講座実行委員会 実行委員長)

講座1：「空き箱で夢の教室を作ろう」

○日時 2009年6月28日(日) 10時～12時

○講師 高橋 和真氏(パッケージクラフト作家)

○会場 新潟県立自然科学館

○参加人数等

子ども：43人、大人：33人 (親子の組数：30組)

スタッフ 12人

*合計：88人

○講座内容

参加者一人一人(または親子で)が空き箱と段ボールを使って夢の教室を制作し、最後にみんなの教室を合体させて「夢の学校」を組み立てた。また、校歌・校章の案を作った。事後に、講師の先生がみんなの案をまとめて「夢の学校」の校歌・校章を作成し、後日、参加者に送付した。

○写真(別紙)

講座2：「とび出すカードでイスや家を作る」

○日時 2009年10月18日(日) 10時～12時

○講師 木原 隆明氏(実行委員)

○会場 長岡造形大学講義室

○参加人数等

子ども：20人、大人：15人 (親子の組数：13組)

スタッフ：10人

*合計：45人

○講座内容

本講座は長岡デザインフェア2009参加事業として開催した。1枚の紙に切り込みを入れ、折るだけで立体的なカードを作ることができる折り紙建築についてそのおもしろさに気づいてもらうため、最初にダイカットされた煙突のある家を折った。そして実際に、はさみやカッターを使って、階段、お面、イスの基本形をつくり、さらにそれをもとにオリジナルなイスをつくった。

○写真(別紙)

講座3：「あじろて工作」

○日時 2009年11月3日(月) 9時～12時半

○講師 巽 登志夫氏(木材研究家)

○会場 胎内市産業文化会館

○参加人数等

子ども：31人、大人：17人 (親子の組数：17組)

スタッフ：26人

*合計：74人



図1 講座1の実施風景



図2 講座1で制作された作品



図3 講座2の実施風景と作品



図4 講座3の実施風景

○講座内容

本講座は胎内市生涯学習フェスティバル参加事業として開催した。最初に、木材の性質についての説明があり、その後、様々な木材を薄く切ったものに触ったり、匂いをかいだりした。そして、木材の薄片を使って格子やあじろに編む方法を学び、参加者は好きな材料を使って、板状に編んだものやそれを丸めた物入れなどオリジナルな作品を作った。

○写真（別紙）

「こどもたてもの探偵団」にみんな集まれ！

堀江 秀夫（富山大学・北陸支部富山支所）

子どもの頃から建物や街並みへの関心を深めることを目的に、小学生を対象とした街並み探検のワークショップである「第5回 こどもたてもの探偵団にみんな集まれ！」を、去る2009年10月10日（土）に富山県高岡駅前のウイングウイング高岡を拠点として実施した。

いつもの見慣れている建物をデジカメで切り取って持ち帰り、「反対の感じのする一組のたてもの」を「対になる言葉」とともに発表する内容で、1チーム5人の地元の小学生が参加した。例年5～7チームが参加していたが、今年は9月に富山大学内で新型インフルエンザ罹患者が発生し、行事の中止も一時考えたりしたため小学校への案内が遅れたこと、なるべく街中の行事には参加しないよう指導している小学校もあったこと等が、参加チーム減少の原因と思われた。

5人の子どもたちは「たてもの探し」のため、9時30分に高岡駅前から郊外に向かう路面電車「万葉線」に乗って元気に出発。各チームには、安全確保と写真撮影補助のため、学会員と学生アルバイトが付き添っている。子どもたちは、「たてもの」がありそうな場所を地図で探して近くの駐車場で降りては、青空の下、高岡の街並みを観察しながらパチパチ写真に撮り、また路面電車に乗って次の探検場所へ移動を繰り返した（写真1）。

昼にはウイングウイング高岡に再集合し、昼食を取りながら（写真2）、子どもたちは学生アルバイトと協力して持ち帰った建物や街並みの写真をワイワイガヤガヤしながら「反対の感じのする一組のたてもの」を「対になる言葉」とともにまとめたパワーポイントのスライド作りを行った。今回は仲がよい小学生5人1チームであったため、非常になごやかな雰囲気であった。作業が終わった時点で、スライドをスクリーンに写しながら、一人ひとりが「たてもの」の説明と感想を発表し、子どもたちが緊張する場面となった。この発表に対して、功績を称える探偵団賞を授与して午後4時にワークショップを終了した。

帰り際、子どもたちから「来年も必ず参加するから、またやってね」と言われたときは、やってよかったとしみじみ思いました。



写真1 万葉線の中から気になる建物を探す子どもたち



写真2 昼食を食べながら「たてもの探検」について語り合う子どもたちとアルバイト学生

「北陸の建築文化と宮大工」

富樫 豊 (富山建築・デザイン専門学校建築学科教務部長)

文化週間事業の講演会は10月31日(土)13:30-16:00、富山県民会館701号室にて、60名の参加者で盛況のうちに終えた。以下に、概要を報告する。

●テーマ

「北陸の建築文化と宮大工」

●主旨

北陸地域では中世以降は真宗王国として社寺建築が盛んであり、優れた建築技術者いわゆる宮大工が多く輩出した。ここで、宮大工に焦点を当て北陸3県における宮大工の実態や建築について考えてみることにした。

●講演(三部構成)

(1) 講演1: 「石狭美浜出身の木子棟斎と木子家について」吉田純一(福井工大教授)

幕末から現代までの建築については、木子一門の役割が大きいとして、創始者
木子棟斎の人物像・建築観を紹介し、彼以降の技術継承について鋭く分析し
解説した。

(2) 講演2: 「石川の近代寺社建築に携わった宮大工」田中徳英(石川県文化財保護指導員)

加賀の名工と建築について語った。なお、名工は、岩城庄之丈、松井角平、
中川政乗、柴田貞次、天日仁太郎、真柄要助、の6氏である。

(3) 講演3: 「技術・心得の伝承について」酒井仁義(酒井匠四代目棟梁)

生い立ちを語った。そのなかで職人は、技だけではなく、心が大事であり、その意味で
心技体と一帯になって初めて、大工職人であるといえると強調した。

●ほか

討議では、宮大工の人なり・建築観なりに関心のある方が多く、宮大工の起源や、寺院建築の住職と宮大工の関係について質問が集中していた。



写真1 会場の様子①



写真2 会場の様子②

「加賀の建築」

村田 一也・森原 崇（石川高専）

北陸支部石川支所では、去る2009年10月10日（土）に2009年建築文化週間「加賀の建築」として、石川県の加賀方面に点在する近代・現代建築および歴史的建造物の見学会を開催しました。

当日は金沢駅を出発し、講師の解説を交えながら、獅子吼高原、小松駅周辺、大聖寺駅周辺を主な見学地とし、獅子吼高原の獅子ワールド館（水野一郎氏設計）を始まりに、小松芦城公園周辺のまちづくりの様子として、修復された近代建築および本陣記念美術館（黒川紀章氏設計）の見学、中谷宇吉郎雪の科学館（磯崎新氏設計）、大日盛酒造資料館、大聖寺駅周辺の建物として錦城中学校（安藤忠雄氏設計）、県立九谷焼美術館（象設計集団設計）、北前船の船主邸宅であった蘇梁館、実性院について見学しました。参加者は一般7名を含む23名で午前9時から午後6時までの見学会でした。

小松市芦城公園周辺には最近改修の終わった建物があり、まちづくりの拠点施設となっています。絵本館ホール十九番館は登録文化財であり、旧加能合同銀行の建物で現在はホールとして利用可能になっています。また、2000年に開館した宮本三郎美術館と旧教育庁舎の外観を保存し改修された空とこども絵本館があり、この界隈は近代的な様相が残されています。

また、大聖寺駅周辺は県立九谷焼美術館が市立図書館に隣接し、親水公園を要して周辺の景観をつくっています。北前船の寄港地として重伝建地区に指定されている橋立港から移築された蘇梁館に近く、昔ながらのまちなみも少なからず残っています。川沿いを歩いていくと錦城中学校にたどり着き、ここでは建物内も見学させていただきました。

当日は天候にも恵まれ、現代建築はもとより、近代建築を活かしたまちづくりや景観保全の様相について学ぶ機会になったかとおもいます。



写真1 錦城中学校見学



写真2 空とこども絵本館見学

研究の意義を深く考える

飯塚 勇太
(新潟大学)

発表タイトル：
ヘルムホルツ共鳴器の共鳴周波数の解析実験について <環境系>

私は現在、ヘルムホルツ共鳴器の共鳴特性に関する研究を行っています。ヘルムホルツ共鳴器はネックと呼ばれる細い開口部とその背後に空洞部を備えた構成で、ネック部の空気が塊となり背後空洞部がバネのような働きをすることで、ある特定の周波数で共振運動を生じ、吸音する機構となることが知られています。また、理論では単純な共鳴器は開口部で共鳴周波数の粒子速度が増加し音圧が低下すると言われています。しかし実際の測定を行った結果、これに従わないことが判明しました。この研究ではヘルムホルツ共鳴器の一般の音場における音響特性の評価を行うことを目的としています。

プレゼンテーションをするときに特に大切と考えたことは、自分の研究に対して一つ一つ細かいところも理解していくことです。研究の意義をしっかりと持つことで発表も質疑応答もメリハリのあるものにできると思います。

この賞をいただいたときはとても驚きましたが、日々の研究の成果を皆さんの前で発表し、このような賞をいただけたのをうれしく思います。また、熱心な指導をしてくれた先生や協力してくれた研究室のメンバーにも大変感謝しています。これを糧にこれからも研究に励みたいと思います。



音響管での実験



一般居室の実験

寒冷地の住宅における給湯負荷とCO2ヒートポンプ給湯機の効率に関する研究

小澤 明也

(信州大学大学院工学系研究科社会開発工学専攻修士課程1年)

この度は若手プレゼンテーション賞に選出いただき、光栄に感じております。発表させていただいた、住宅における給湯用途での消費エネルギー及び高効率給湯器に関する事柄は、今後の住宅での省エネを考える上で非常に重要なテーマです。住宅の消費エネルギーの三割を占めている給湯での消費エネルギー(図1)を削減するには、高効率給湯器の普及が必要となります。

普及してきている高効率給湯器には、様々な種類があります。そして、それぞれに特性があります。その中でも、CO2ヒートポンプ給湯機(図2)は大気中の熱を用いるため、環境条件がキーポイントになります。そこで、夏は暑く冬は寒い長野におけるCO2ヒートポンプ給湯機の実態調査は、今後の高効率給湯機の利用を考える上で重要です。今回の発表では、長野市の戸建住宅一棟についての調査を報告させていただきました。調査結果としては、貯湯タンク内に残ってしまう前日の湯が、夏期間の効率の低下に起因していました。CO2ヒートポンプ給湯機は、季節毎に変化する湯の使い方に合わせた運転をさせることが省エネを図る上で重要です。

最後に、北陸支部大会における自分のプレゼンを一言で表すとしたら「七転び八起き」です。発表の際に失敗してしまった部分がありましたが、発表も含め研究はtry&errorの繰り返しであり、転んだらもう一度起き上がればよいと感じました。



図1 計測対象住宅における全2次エネルギー消費量に対する用途別の2次エネルギー消費量の割合



図2 CO2ヒートポンプ給湯機

「土」に関わるが、泥舟にならないか？

浦 憲親

(金沢工業大学環境・建築学部建築系 教授)

0. 土に関わること

建築では、土に関わることになると空気・水・粒子までを含み複雑な挙動をする土質・基礎ですが、ここでは土壁用の原土を話題にしたいと思います。土壁は、拙速なことを評価する最近の風潮からは取り残され、見ることも少ない伝統工法になりつつあるようです。一方で、廃棄物処理などから資源循環材料として改めて見直されてもいるようで、土壁の街並みは環境改善、護美の出ない21世紀の建築材料の大きな転機になると考えています。

以下は結果の一部ですが、2007年3月25日発生した能登半島地震で被害を受けた土蔵の部分補修に用いた輪島産土で作製の日干しレンガ

(□70×150×210mm : 2200cm³、密度 : 1.24g/cm³) についても述べています。

1. はじめに

土壁は、土自体が地域を問わず入手できることから多くの建築物に利用されてきたが、最近では乾燥に時間を要するため敬遠されている。一方で、文化財の維持保守、町家の耐震補強などから実大供試体による力学的解析を試みているが、原土そのものを調べることは少ない。

土壁用の原土は無限にあるが、実験は実際に使われ採取地の分かるものを調べている。しかし、土壁は地域性、左官職人の技術差もあり定量化は困難であるが、一定調合の下で原土の性質を評価することは、新たな工法・構法への発展と改善に繋がり、一つの指標になると考える。

2. 原土の搬入時の状況 (写真1)

搬入時の地域産土は、いずれもこぶし大の固まり、木根などを含んでいる。京都産土は袋詰めでも販されているが、土の色は袋によって異なるように目標フロー値135±10を得るための単位水量もずれることがある。

輪島産土は粘りがあり、赤みがかかった茶色でしっとりしているが、高松産土は明るい茶色で、両者とも調合すると単位水量が多くなる。岡山産土はザラザラした感触を得る。豊田産土は黄色に近い茶色で微粒子も多いが、満遍なく分布していることを岡山産土と同様に粒度分布から示される。

3. 原土別の粒度分布 (図1～図3、写真2)

原土別の粒度分布は、京都および豊田産土の場合、粘土、シルト、細砂まで広範囲である。輪島および高松産土は中抜けて微粒子と細粒子に片寄るが、岡山産土は粒度分布がよい。

原土について、ふるい分け試験の75μmでみると、積算値80%以上あると粘りがある。また、積算値50%の平均粒径を用いると、岡山産土は30μm以上で、使用するには粘りのある原土を混ぜると効果的であるが、他の地域産土は20μm以下であることから砂を加えることになる。

参考までに、豊田産土を除く原土の含水率と積算値の関係を表すと2、10、20および75μmの時、相関係数 $r = 0.7$ 以上である。また、積算値と単位水量の関係は、砂/原土(S/C)比に関わらず $r = 0.7$ 以上と高く、微粒分を



写真1 原土の搬入時の状況

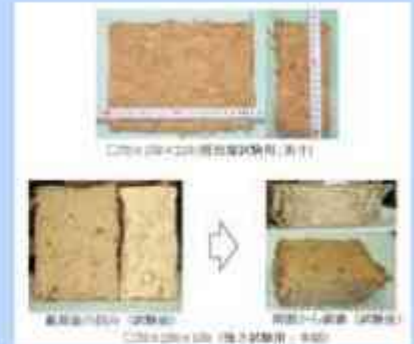


写真2 輪島産土を用いた土蔵補修用の日干しレンガ (秋野氏提供)

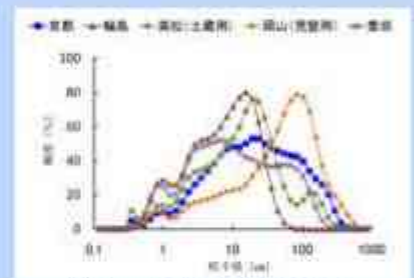


図1 原土別の粒度分布

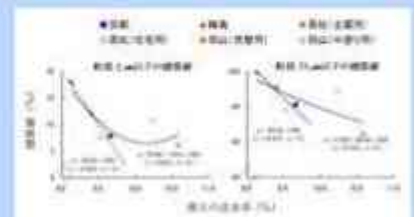


図2 原土の含水率と積算値の関係

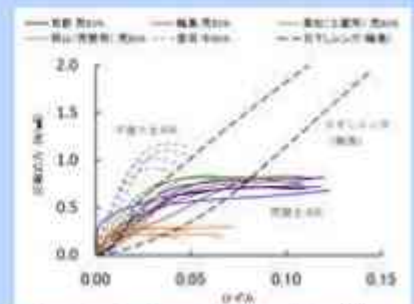


図3 圧縮応力-ひずみ曲線

多く含む原土ほど練混ぜ時に多量の水が必要なことを示している。

圧縮強さは原土の場合、文献による荒壁0.3 N/mm²以上を満足する。一方、日干しレンガのひずみ曲線は、応力初期でようかん

(□40×40×160mm:256cm³) と差はないが、ひずみ0.13程度で強制的に試験を終了した。その時の圧縮強さは2.0N/mm²前後で、ようかんの大略3.0倍を与える。

4. まとめ

土壁用の原土は地域によって性質が異なるが、必要な品質条件は微粒子と細粒子の差が大きく、粒度分布の悪い平均粒径20μm以下の原土である。粒度分布が良い原土は粘り不足で、饅離れがよく職人の技術差が現れない。また、土壁の修復として日干しレンガも一つの方法であるが研究は皆無で、それをを用いた街並み造りと壁土自体を考える機会にしたい。

謝辞：試料提供者および修士・山本智大君に感謝の意を表します。また、平成21年度金沢工業大学工学設計Ⅲ受講者にご協力を頂きました。

参考文献：JASS15,ほか。

土壁の起源についての考察

新川 電悠

(信州大学環境施設部)

10年前ぐらいから、テレビの影響もあると考えられますが、土壁についてのワークショップや研究会などをよく見かけるようになりました。ただ、土壁の性能やその印象、工法など多くのことが語られているものの、やはり歴史となると、やはり色壁が発達してきた近世の京都や土蔵のことが多いように感じられます。そのため、今回は日本における土壁の起源について少し考察してみたいと思います。

日本における土壁の歴史研究と言えば、代表的な研究者として山田幸一先生と川上邦基先生があげられます。この両名の起源についての見解は、正倉院文書を証拠にして仏教と共に大陸文化のひとつとして導入（山田）と日本書紀に見られる埴壁をもって起源（川上）としています。いずれも歴史的にはこれ以上遡ることができなかつたと考えられます。その理由として、土壁が可塑性をもっており、木材や石材とは異なり、その遺構が極めて遺りにくいことにあります。そのため、土中からは、現在もほとんど出土品が見つかることはありません。ほとんどというのは、土壁が出土するケースが火事跡の残る箇所ではレンガのように硬化した状態でのみ見つまっているためです（草戸千軒遺跡や法隆寺境内若草伽藍より発見されている）。

そのようなことから、土壁の起源については、現在のところ文献や絵画資料で遡る以外に方法がないのが現状です。そのため、山田先生は、土壁の技術は大陸から渡ってきた文化としたのでしょう。この大陸説を絵巻物といった絵画資料でもう一度確認してみると、土壁は寺院での使用が多く、町屋は板壁や竹を編んだような網代壁ばかりであることがわかります（図参照）。貴族住宅においても鴨居上の一部に留まっていました。しかも、町屋での土壁使用は室町時代の色壁文化が入ると爆発的に増えてきますが、それまでは見られませんでした。これらの資料から、大陸から渡ってきた土壁は日本において寺院から始まり、約10世紀近い時を経て、一般市民にその技術が伝わったと推測できます。

ただ一点気になったこととして、絵画資料をくまなく見ると、11世紀の信貴山縁起の農家建築では外壁に土壁が使用されていることがわかりました。ただし、この土壁は寺院や貴族住宅の白色の仕上げ（漆喰？）や京都の色壁とは異なり、仕上げがなされていませんでした。農家建築自体がほぼ描かれていない絵画資料で、しかも1つだけの事例ではなんともいえませんが、日本古来の形を色濃く遺す農家建築で土壁が使用されていたということは、土壁の使用された時期は案外古いのかもかもしれません。この北陸支部においても多く見られる古民家の土壁が、いつから伝わる文化なのか、「もしかしたら大陸文化以前の日本古来のもの？」などと思いながら見つめると少しロマンチックな気分になるのではないのでしょうか。



図1 板壁（年中行事絵巻）



図2 網代壁（年中行事絵巻）

土に学ぶ

吉田 恵子

(株式会社わがガーデン専務取締役 彩園店長兼任/園芸装飾技能士、造園施工管理技士)

私は、現在庭づくりに携っています。室内緑化・外構・庭をプランし施工する上で、植物の生育を助ける健全な土壌づくりの為に、様々な土を見てさわって、植物の特性や植栽場所に応じた用土を選別し、また、土壌の改良や、排水を考慮したプランを実行しています。

身近に自然を取り入れたいという想いが、住まいに庭づくり、現在、私は鉢植えや室内園芸も楽しめます。多くの用土が比較的安価で手に入り、土壌改良や鉢植えを様々に試すことができるようになりました。

用土の開発は、鉢植え、室内緑化の普及によるものが大きいといえます。当社の1部門である貸し植木業（現グリーンレンタル業）は、昭和初期に愛知県や九州の指宿などを中心に発展し全国的に広まりました。様々な熱帯植物が発掘され、その生育に適し、またレンタルシステムでの移動可能な、軽くて清潔な用土づくりが研究されています。

鉢植えの基本用土は、赤玉土と腐葉土（6：4）で作ることが出来ますが、たとえば通気性・排水性を良くするにはパーライトや沸石ゼオライトを混ぜ、保水性や保肥性を保つにはピートモスやパーミキュライトを混ぜてつくります。

このような用土の特性を知ることは、室内緑化・屋上緑化・壁面緑化と、様々にカタチを変えて、生活空間に自然を取り入れることを容易にしました。深刻な環境改善策の緑化計画を支えています。

比重の軽い用土を使った屋上ガーデンに携わったときは、真夏の芝庭で愛犬とともにくつろぐ施主さんの「階下温度も期待以上の効果があった」と喜ぶ笑顔に、感動しました。

また、私の周りではガーデニングや家庭菜園を楽しむ人々が増え、家庭用耕耘機を使う女性の姿を見ることも珍しくありません。「庭の一部を家庭菜園にしたい」というご要望や、畑の土壌改良のご依頼の機会もあり、彩園でも実際に家庭菜園を始めました。花壇を耕し、秋にタマネギとイチゴを植えました。楽しみが増えます。

観察日記は『彩園の菜園ブログ』で公開しています。

土壌の恩恵を積極的に享受したい、それが自然との正しいつきあい方であり、私たちの学んでいくことなのでしょう。



図1 室内園芸



図2 バルコニーガーデン



図3 屋上ガーデン



図4 壁面緑化

八潮らしさとはなにか？

田中 邦幸

（信州大学大学院 工学系研究科 社会開発工学専攻1年 坂牛研究室）

昨年に引き続き、信州大学坂牛研究室は、埼玉県八潮市の『八潮街並みづくり100年運動』に参加しました。このプロジェクトは5大学共同で、東北工業大学、茨城大学、信州大学、日本工業大学、神奈川大学が参加しています。八潮市は、つくばエクスプレスの開通に伴い、開発が進んでいます。しかし、東京への通勤・通学が便利になったことで、マンションが多く建ち、どこの駅前とも同じような開発になろうとしています。そこで、市は八潮らしい街並みとは何かを考える運動をし、市民の方に八潮に愛着を持って頂くようとしています。

まず、去年は、八潮市を知ることを中心におき、市内を自転車で駆け巡り、五感を総動員して、「八潮らしさ」とは何かを調査しました。そこから得られた八潮らしさを引き出すような、街づくりに寄った提案を行いました。そして、今年【家づくりから街づくりを考える】をテーマに活動を行いました。活動としては二つあり、具体的な敷地を決め、八潮らしさを持つ住宅を設計提案する『住宅モデル』と、八潮市の市民の方に模擬的な施主になっていただき、住宅を設計する『家づくりスクール』があります。

住宅モデルの活動では、八潮市以外の地方からの視点で八潮らしさを浮かび上がらせようとしています。信州大学は、工場誘致によってできた、大きな区画に密集した小さな住宅群に注目しました。その周辺の街区は、道路が格子状に走り、住宅と工場が混在しています。提案では、この住宅群の特徴である、密度による関係性をどのように活かすかを考えて行きました。中央に通る道に対しては、軒をそろえることで、住宅の裏には、庭をつくることで、そして、ある住宅を見た時に隣の住宅の側面が見えることで、関係性を保てることを考えました。

家づくりスクールでは、市民の住まい方から、八潮らしさを引き出すものとするものです。八潮市に、実際に住まれているかたには、八潮らしさが無意識に入り込んでいるはずで、その無意識の八潮らしさを顕在化することができれば、新たな八潮らしさとしても提案できると考えています。例えば、コンパクトに住まうという要望には、八潮の比較的大きな敷地割りの中で、庭を大きく使おうという意識が見て取れます。また、実際に施主の方から、要望を聞き、提案を繰り返して行くことはいい経験になりました。そして、この活動で、市民の方に家づくりから街づくりを考えて頂く、一つのきっかけになればと考えています。

地域らしさを浮かび上がらせるには、様々なアプローチがあります。違う地域のひとが調査し、提案する方法、そこに住む人たちが考え、行動する方法。どちらも有効な方法ですが、ある一つの視点でしか地域を見れない可能性があります。『八潮街並みづくり100年運動』では、多数の他地域の視点と、市民の視点が混ざりあうことで、八潮らしさという地域性を取りこぼさなく、浮かび上がらせようと考えています。現在の街づくりは、一方的な視点ではなくこのような多視点からして行くべきではないでしょうか。



図1 打ち合わせ



図2 敷地調査



図3 住宅モデルの提案



図4 施主との打ち合わせ



図5 発表



グリーンウッドワーキングを通じて

石澤 菜実

(富山大学 造形建築科学コース3年生)

去る10月、私はアートNPOヒミング主催のグリーンウッドワーキングのワークショップに参加しました。グリーンウッドワーキングとは、今はほとんど行われていない欧州の伝統的な手法です。森に入り、木を伐採し、その場で加工して木製品を作り上げる手法です。簡単な小屋を建てて一時的な住居兼仕事場とし、そこで木製品を作っていました。商品だけでなく、小屋での生活品、それら木製品を作る為の旋盤等も作ったそうです。今では電力で木工機械を動かしますが、バッテリーなど無かった当時は、樹木の弾性を動力として使ったそうです。

ワークショップは富山県氷見市の森で開催されました。今回は三脚のツールを作りました。まず木を切り倒します。こればかりは本職の先生にお願いして、参加者は木の傍らで見守っていました。次にこの丸太にクサビを打ち込み斧で放射状に6等分か8等分にします。この割った部材をナタで削り、椅子の脚として使います。座枠と貫は適当な木の枝を調達し、両端を削って脚に差し込むようにします。座面は雪吊りなどに使う荒縄を巻きました。

また、富山市のグランドプラザで開かれた、「県民で使おう、とやまの木」というイベントに参加しました。このイベントは、来場者の方に富山県の森林活用に対して行われている活動を知ってもらおうというイベントです。イベントでは上記のツールを作るグリーンウッドワーキングのワークショップ、伝統構法の建前のパフォーマンス、富山大学芸術文化学部生の県産材の杉を使った椅子の展示、県産材の積み木広場等々を楽しむことができました。また、実際に山から切り出した大きな杉の木を枝葉をつけたまま、まるまる展示しました。予想以上の来場者で、大成功でした。

これらのイベントを通して、森の中はとても気持ちがよくて、変わらないきれいなものとして、ずっと残して生きたいと強く思いました。今まで設計はユーザーの満足性の為だけに考えてきましたが、こういった自然や大きな意味での環境を考えることも大切だと気付かされました。

また、富山の森のことについて林業に従事している方からお話を聞く機会があり、その話を聞いて思ったことは、地場材が使われにくいということ、林業は今とても苦しい状態にあるということです。安い輸入材に押されて衰退してしまった国産材の消費ルートの復活は膨大な時間がかかるでしょうし、難しいと思います。それでも、この話を聞いたことで、森林と共生していくことを設計の立場から考えたいという私の想いの再認識、そしてより強くそう思うようになったと思います。



図1 丸太の分割



図2 組み立て



図3 完成したツール



図4 「県民で使おう、とやまの木」イベントの様子



図5 伝統構法の建前



インサーの活動 ～笑顔が見たくて

山本 義人

(金沢工業大学 環境・建築学部 建築学科3年)

私に建築士を目指す夢を与えてくれたものは、朝日放送さんの「大改造!! 劇的ビフォーアフター」です。内容は様々な問題を抱えた家が、一流の建築士である「匠」たちの見事なリフォーム術によって劇的に大変身するという番組です。敷地条件や家族構成、実状を考慮し毎回見事なリフォームで見るものを楽しませてくれますが、それ以上に喜びや笑顔、感動し、感謝を述べる家族の顔をみていると毎回ながら感極まるものがあります。建築設計では敷地条件やその周囲の環境を読むことは必須条件ですが、家族の想い(顧客の要望)に沿って温かな提案を積極的に取り入れることは、住宅だけにとどまらず、建築の根底に存在している最も基本的なことであり、大切なことだと思います。「建築やその周りのことを考えて何ができるか」私は考えてみました。

その考えをカタチにするべく私はインサーの活動を開始しました。インサーとはインテリアデザインサークルのことで、活動内容は家具作りを中心にインテリアに関する様々なことを実践的に学んでいくというものです。インサーを設立して早1年半、本格的な最初の活動は、指導教員を顧客に見立て、指導教員の研究室の家具作りを行ったことでした。その後、サークルの活動を知った他の先生から、普段活動している建物内のラウンジのテーブルをデザインしてみても?と声をかけていただき、設計製作を行っています。さらに、インサーの活動を耳にした体育の先生から、自宅の家具デザイン・制作を頼まれました。しかし、その話を進めているうちに、話題はいつの間にかその先生のお子さんが通っている学童保育の話に移っていきました。学童保育とは、近隣小学校に就学または校内区に居住している児童を対象として、児童に安全で豊かな放課後および学校休業日の生活の場を提供し、保護者の就労を援助しながら、児童の健やかな成長を育むことを目的とした施設です。その学童保育が改修工事を行うに伴い、その先生からインサーの活動や作品の事を聞いた学童保育の保護者の方々が私達の活動に興味を持たれ、家具のデザインと制作を進めていくことになりつつあります。

学童保育の家具デザインをする前に、施設の現状と、要望を知るために、現地調査を行いました。その際に子供たちと遊ぶ機会があり、現状を把握すると同時に子供たちと関係を持てるようになり、完成した時の子供たちの笑顔を見るのが楽しみになりました。

インサーの活動を始めたことによって、色々な人との繋がりが生まれ、笑顔を見る機会が増えました。誰のためのどんなインテリアが必要なのかを考え、作品が完成した時、そこには笑顔が生まれます。それは、人を幸せな気持ちにしている何よりの証拠ではないでしょうか。たくさんの笑顔と幸せに出会うために、私たちはもっともっとインテリアについて学び、実践していきたいと考えています。



図1 先生の研究室の家具制作風景



図2 家具設置



図3 制作した諸々の家具



図4 インサーのメンバーと先生



若狭町・熊川宿のまちづくり

宮田 勝美

(宮田建築設計室)

平成8年に国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた福井県若狭町の熊川宿は、選定から14年を迎えようとしています。

その間、地元「若狭熊川宿まちづくり特別委員会」を中心としたソフト事業と、街並みの修理・修景を中心とした景観整備事業により、熊川のまちづくりは着実に進んでいます。

伝建地区としての建物の修理・修景では、地区内に約200棟ある伝建物のうち、これまでに約70棟の修復が完了し、さらに毎年4~5件の修理が行われる予定であります。

建物の修理・修景については、当初より熊川宿の調査をされ、現在は保存審議会委員長である福井大学の福井宇洋先生や、同委員である建築家の吉田桂二先生、そして文化庁の調査官等多くの方々にご指導を頂きながら進めて参りました。

ここ熊川において特筆すべきことは、住民の方々の多彩なまちづくり活動であります。

伝建地区の選定以来、語り部の養成や、つる細工や山車・てっせん踊りの復活など、活発なまちづくり活動が行われて、このことが景観整備事業と相まって熊川をより魅力的なものにしています。

また、保存審議会委員である西村幸夫先生による熊川小学校での授業や、ヒマラヤ南東のブータンから人を迎えての歴史的建造物保存文化交流など、多彩な文化活動も行われております。

特に記憶に残っているのは、東大教授が我が校へ来たと目を輝かせていた小学生たちや、ブータンの中学生が言った「身近にある建物や伝統文化や習慣を大事にすることは、自身の徳を積むことになる」との言葉です。

この子供たちが大人になり、自分たちのまちや文化を残そうと努力してくれるなら、今、我々のしている仕事は、とても意義のあることであります。

先日、修復が済んだ神社の能楽堂(江戸時代創建)で、約70年ぶりに能が奉納されました。地元住民による祭りばやしもあり、今後は、途絶えていた「浦安の舞」を復活させようとの動きが出てきました。

当初より観光とは一線を引いて、まちづくりをしてきた熊川も、住民の高齢化や空き家の増加、それに毎年増え続ける観光客に対する受け入れと、課題は山積しています。

ともあれ、今熊川を歩く時、先人が残した素晴らしい街並みや文化を後世に残そうと努力している人々の姿を見ることができます。

こうした住民の努力と活動が、伝統的景観の維持を目的とする伝建制度と1つになり、目を輝かせていた子供たちへ引継がれることとなります。

200年も前に建てられた建物が、修復され、今後も使い続けられることは、たいへんなことであります。この様な仕事ができることに感謝し、今



写真1 平成の水百選の前川と芋車



写真2 冬の熊川宿 雪下ろし風景



写真3 がったりで遊ぶ子供達



写真4 修復が済み約70年ぶりに能が奉納された白石神社



写真5 増加する観光客と街並み

後もより一層努力を致します。

若狭へ来られたら、ぜひ熊川宿へお立寄り下さい。